

A

ART

Chim ↑ Pomの「プロジェクト」は止まらない。森美術館で開催中の『Chim ↑ Pom展：ハッピーズプリング』レポート。

March 11, 2022 | Art | casabrutus.com | photo_Keisuke Fukamizu text_Yoshio Suzuki

不快、不気味、不まじめ、不謹慎、不遜。そういうファーストコンタクトをもたれることもよくある。その誤解はしだいに解かれ、共感され、やがて協働にまでたどり着く。

現代美術の役割は美しくて巧みなものばかりを生み出すことではないとChim ↑ Pomは活動続ける。社会問題、世界情勢に介入し、誰にも真似できないやり方を考え、抜群の実行力と体当たりで奮闘してきた。彼らのおかげで日本の現代美術は15年くらい進んだ!?



《スーパーラット ハッピーズプリング》（2022）今回の展示のための新作「スーパーラット」。オリジナルは黄色に着色されるなどあのキャラクターを模しているがこちらは金色。

Chim ↑ Pom。卯城竜太、林靖高、エリイ、岡田将孝、稲岡求、水野俊紀からなるこのアーティストコレクティブ（複数名のアーティストが協働する形態）が理解されなかったのにはいくつか理由がある。あまりにも前代未聞だからだ。あるいはいまでも彼らの行動の表面をとらえて、ただのお騒がせ、おふざけ、おちょくり集団と一括する向きもあるだろう。

そもそも簡単に理解されたくないという考えの方がホンネではないのかとも思えてくる。まず、その名前。初めて聞く人を相手には、口に出すのもためらわれるような。しかも、表記の中に上向き矢印が入っていることでの強調。

メジャーなアーティストコレクティブとしては多めの人数である。作品は自分たちが住む都市の問題から、社会のあり方、国際情勢までも取り上げてテーマにしているその壮大さ。歴史的な課題にも言及するし、襲いかかる震災や事故、パンデミックに対する諸問題をアートというフィールドに引き込んで、真正面から戦っている。その果敢ぶりを担保するのは、誰も思いつかないような独創的なアイデア、類まれな行動力である。



「道」の展示にて、Chim ↑ Pomのメンバー。左より、林靖高、水野俊紀、岡田将孝、稲岡求、エリイ、卯城竜太。撮影：田山達之 画像提供：森美術館（東京）

簡単には理解されなかったり、ときに誤解されたまま、あるいは時間をかけて理解されたりしながら、意外にも結成17年目を迎えたChim ↑ Pomは美術館での最大規模の個展を開催中である。

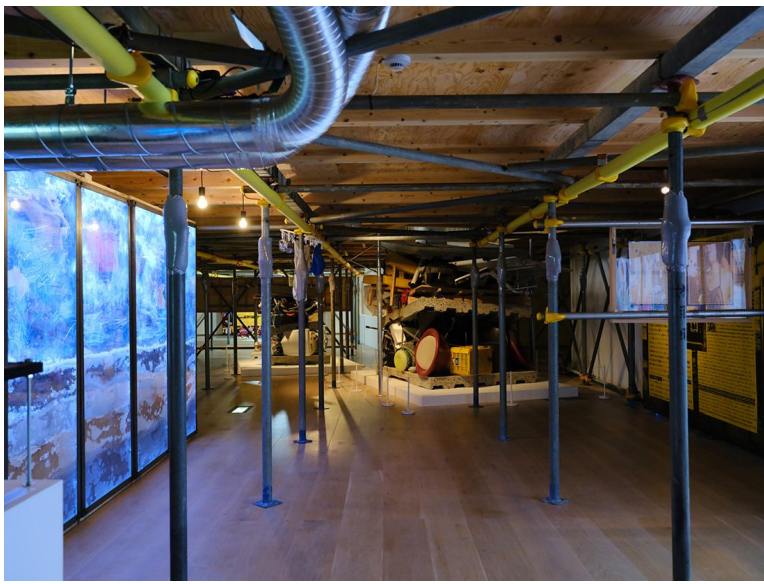


「ヒロシマ」のセクションの展示風景。

主催の森美術館館長の片岡真実氏はこう語っている。

「（社会問題や世界情勢、災厄という）問題に正面から向き合い、当事者意識を持ち、さらに見る者にも当事者意識を喚起するようなことをアートを通して行ってきました。体当たりな制作方法、出来上がった作品に対してはときおり、物議を醸したこともありましたが本展ではその多様な視点を展覧会の中にも再現するということで展示の工夫がなされています」

さらにこの展覧会を担当した同館シニア・キュレーターの近藤健一氏は「Chim ↑ Pomは非常に卓越した、誰にも思いつかないようなアイデア、コンセプトをもとにそれを実現するという行動力をもち、ユーモアや皮肉などを混じえ、強いメッセージ力を持っているという点で、日本の美術界の中で独自のポジションを構えています。東日本大震災以降、彼らの国際的な活躍も目覚ましいこと、プロジェクトも大型化して展開していることなどからこの時期に彼らの回顧展をやるというのはまさにベストなタイミングなのではないかと思っています」と語っている。



「都市と公共性」の展示セクション、低い天井、雑多な展示。このカオスこそ都市の素顔である。

ただし、「回顧展」という位置付けについて、Chim↑Pomメンバーの卯城竜太はこう語る。

「回顧展であることは間違いないけれど、同時にそれがプロジェクトになるようにと思って進めてきました。主にそれは4つの観点から展開されています。一つは《くらいんぐみゅーじあむ》、託児所ですね。あと今回、順路を、普段は必ず左回りなんですけども右からも行けるようにしました。道がぐるっと一周いろんな表情やアスファルトなど続いているように残しております。森美術館は丸いですよね。それをイメージして、終わりのなく始まりもないような丸い道を全体に描いてます。賛否両論がたくさんありましたので、作品の見方もいろんな角度から見えるように、順路とか、人の動きとかをととても自由に作りました。何回来てもいろんな見方をしたら、作品の解釈とか、変わるだろうと思います。もう一つは道。でっかい道をつくりまして、そこでたくさんいろんなプロジェクトを多様な人たちと展開していきたいと考えています。あとは美術館内から排除された作品から美術制度について様々な観点から考える別会場の共同プロジェクトスペースです。この4つがメインですが、これは開始後行われていくので今、始まったばかりというふうに思ってください」

展示のセクションとしては10に分かれており、それに館外の共同プロジェクト・スペースがある。順番に紹介していく。

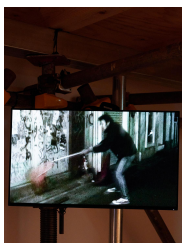
●都市と公共性



《ビルバーガー》（2018）。解体予定の新宿歌舞伎町のビルの床をくり抜いて各階フロアや什器などをハンバーガーのように積み重ねた。



《スーパーラット》（2006/2011）ながら、爆発的に増えるスーパー



まず、「都市と公共性」。会場に入っていくと、薄暗くて、工事用足場の単管が組まれた天井の低い空間が待っている。Chim↑Pomは東京をはじめとする都市を舞台に多くのプロジェクトを行っているが、彼らの代表作である《スーパーラット》の最新版が登場する。

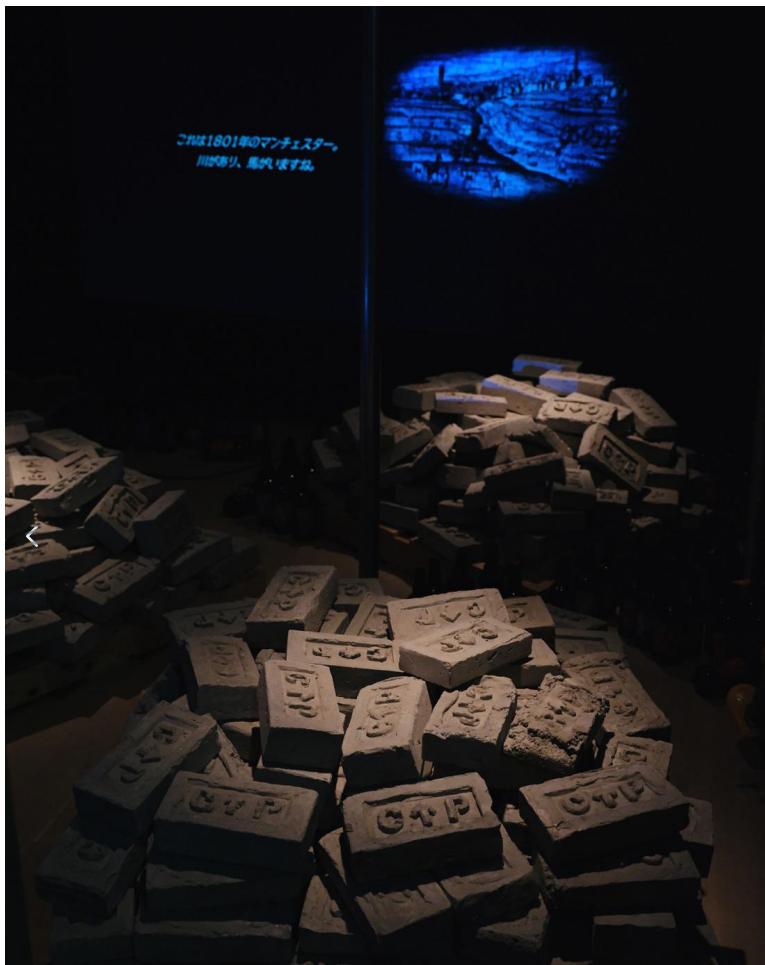
スーパーラットとは駆除薬剤に対して抵抗力を増し、巧妙化、強靱化するネズミで1964年の東京オリンピックを前に行われた都市の「浄化」を機に現れたとされている。その増加が都市部を中心に問題になるさなかの2006年に、Chim↑Pomが制作を開始した。渋谷や新宿といった繁華街で、作家メンバーがスーパーラットを網で捕獲。作品としては着彩された剥製と、捕獲の様子を記録した映像とで成り立つ。「都市の野生」として逆境の中でも自らを進化させ、たくましく人間との共存を図り続けるスーパーラットは、社会の周縁でしたたかに生きつつ活動を続けるChim↑Pomの「自画像」でもある。



《スーパーラット ハッピーズプリング》（2022）

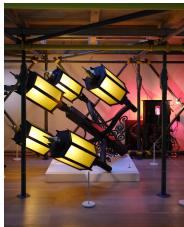
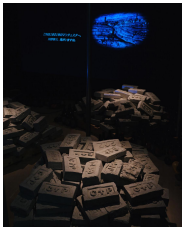
展示中の新作《スーパーラット ハッピーズプリング》は黄色ではなく、金色に塗られている。オリジナルはあの世界的なキャラクターに模して黄色に着色していることや、作品名「スーパーラット」の命名はアーティスト村上隆氏が提唱し、世界に日本のアートの成り立ちを示した「スーパーフラット」を意識しているのでは、などでも話題にのぼった。

さらにこの「都市と公共性」のセッションではゴミ袋を巨大化させ、その中に人が入り、ゴミそのものになってしまう《ゴールド・エクスペリエンス》、歌舞伎町の取り壊しが決まっていたビルの床をくり抜いて、什器も含めて重ねた《ビルバーガー》が展示されている。これはスクラップアンドビルドで新陳代謝していく都市の宿命を見せた作品とも言える。



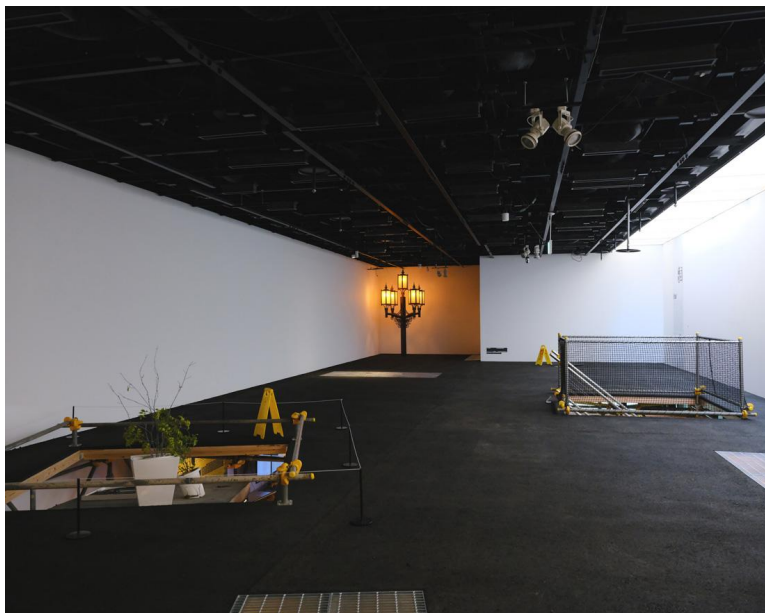
《酔いどれパンデミック》（2019～2022）。19世紀イギリスのコレラ禍のとき「ビールは生水より安全」と見なされたことにヒントを得た作品。

《性欲電気変換装置エロキテル6
わるものとして、「性欲」を電気
にする。
1 / 2



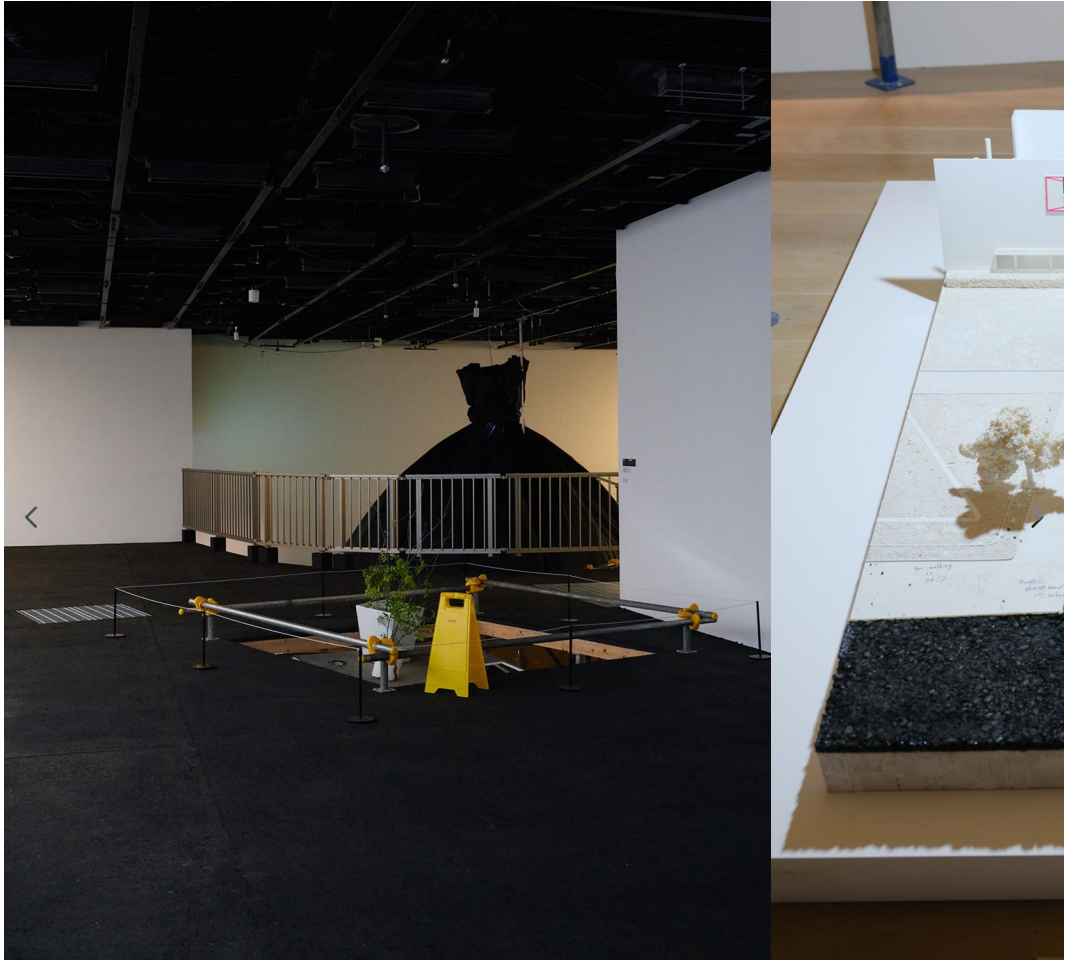
《酔いどれパンデミック》は19世紀イギリスでのコレラ禍のとき、煮沸して生産されるビールは生水よりも安全だとみなされたという史実に基づいて、イギリスのマンチェスターで制作された作品。コレラで多くの人が亡くなり、一斉に埋葬された地下の廃墟でオリジナルビール「パンデミックの一滴」を醸造し、移動型公衆トイレを改装したパブで一般の人々に販売、提供したその再現展示である。

●道



《道》（2022）の展示風景。美術館に持ち込まれた「道」。二層構造の展示室の上部。壁に挟まれてはいるがアスファルト舗装の往来。

低い屋根の展示室の上層にはアスファルトで舗装された大きな道が現れる。美術館の中に道を作ってしまうという作品、《道》だ。会期中にはイベントやパフォーマンスも行われるプロジェクトスペースとして機能する。道は公共の場として育っていくそう。ただのスペースではなく、わざわざ道を作ったことで、ここは美術館なのか、公共の往来なのかと錯覚させるのも狙いだろうか。内の中の外。普通の路上と見立てれば、美術館の制約を超えてできることもあるかもしれない。やや違うのだが、映画『ザ・スクエア 思いやりの聖域』のあの地面に描いた正方形を想起させる。



《道》の展示風景。会期中に行われるイベントやハブニングのプロジェクトスペースにして「道」を育てていく。

《道》（2017～2018）の模型。1階や公道で行われてきた。1階に

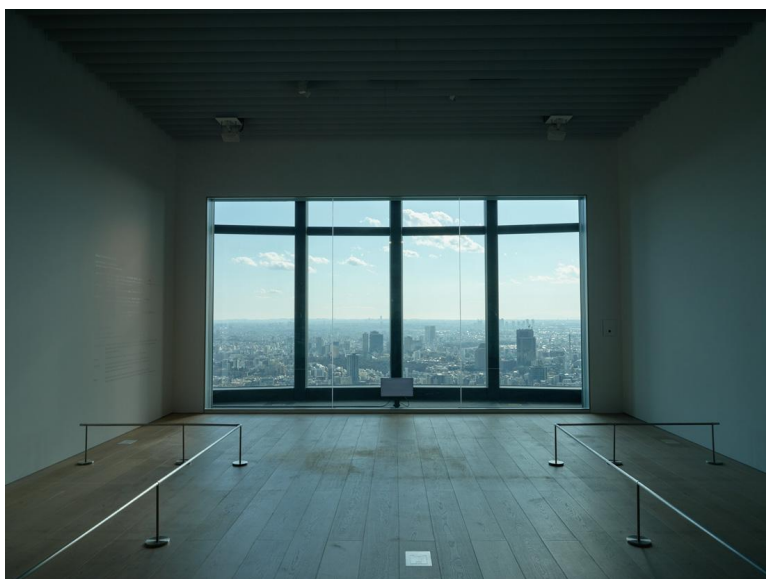


●Don't Follow the Wind



《サイレント・ベルズ》（2017/2022）。「Don't Follow the Wind」は福島第一原子力発電所の事故後、放射能に汚染された帰還困難区域内で行われているプロジェクト。

外を眺められる展示室では「Don't Follow the Wind」を紹介している。これは福島第一原発の事故による放射能汚染のため帰宅困難地域で2015年から現在まで続くプロジェクトだ。Chim ↑ Pomが発案し、自身を含む国内外12組の参加作家による新作が、元住民から提供された数力所の会場に設置されているが、放射能の除染が進み、避難指示が解除され、住民の帰宅が許されるまでは「観に行くことができない」展覧会になっている。ここではサウンドインスタレーションとして展示されており、窓から東京の風景を見ながら、耳は福島に預ける。



サウンドインスタレーションの展示風景。

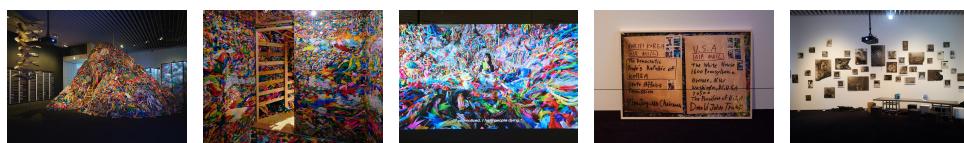
●ヒロシマ



左から《リアル千羽鶴》（2008）と《パビリオン》（2013 / 2022）。実物大の鶴のフィギュアを、個人や団体から1羽ずつ受注制作し、いつの日か1000羽になることを目指す。広島をテーマにした作品の制作は続いている。

《パビリオン》の内部。世界中の
ピラミッドにし、内部からもこの

1 / 5



Chim↑Pomの名前（当初は悪名？）を一躍高めたのが、《ヒロシマの空をピカッとさせる》だった。2008年10月21日、広島原爆ドームの上空に、飛行機雲で「ピカッ」という文字を出現させた。展示では「ヒロシマ」のセクションに写真と動画、関連資料が展示される。被爆地広島の風景にマンガに使われる擬態語を描き、ゆっくりと消えていく様子に記憶の風化を重ねたという。それによって、戦後日本の平和に対する現代の歴史観を映し出すのが狙いだった。



《ヒロシマの空をピカッとさせる》（2009）ラムダプリント、ビデオ 写真：
66.7×100 cm、ビデオ：5分35秒 ©ANOMALY and MUJIN-TO Production（東京）
photo_Cactus Nakao

当初、地元紙は広島市民や被爆者団体代表者の「不快」「不気味」「不謹慎」という声を取り上げた。Chim↑Pomはただちに複数の被爆者団体と交流を始めた。そこで、事前告知の不徹底を謝罪し、その後も団体や一般市民との対話を重ねながら、当地を主題にした作品の制作を続けている。

広島を主題とする作品として展示されているのは、広島市に届けられた大量の千羽鶴を使った《パビリオン》、《ノン・バーナブル》や原爆の残り火を灯し続ける《ウィー・ドント・ノウ・ゴッド》。そこには平和を願う人々の祈りと失われた命への追悼の念が込められている。



《ウィー・ドント・ノウ・ゴッド》（2018/2022）。広島の前爆の残り火では作品制作に加え、火そのものを白い壁とセットでインストレーション作品に。

●東日本大震災



《LEVEL 7 feat. 『明日の神話』》(2011)。井の頭線渋谷駅にある原爆、水爆をテーマにした岡本太郎《明日の神話》の右下の壁の余白に福島第一原発事故の絵を勝手に加えたドキュメント。

《レッドカード》(2011 / 2022)に従事。休息時間に、大爆発した

1 / 4



「東日本大震災」に関連するセクションもある。震災を機に《不撓不屈》、《リアル・タイムス》、《気合い100連発》などの作品が誕生するのだが、物議を醸したといえば《LEVEL 7 feat. 『明日の神話』》である。渋谷駅井の頭線コンコースに設置されている岡本太郎《明日の神話》の右下の壁の余白部分に福島第一原発の事故を描いた絵をゲリラ的に設置したのだ。岡本太郎の絵はもともと広島、長崎の被曝、第五福竜丸の水爆実験事故をモチーフに描かれているが、Chim ↑ Pomは同様のタッチで福島原子炉建屋からドクロ型の黒い煙が上がる様子を描いた。当初、匿名の行為として扱われた。

●ジ・アザー・サイド（向こう側）



《USA ビジターセンター—モデルユニット》(2017/2022)。現地に作ったツリーハウスからは「自由の国」の広大な風景が一望できる。今回の展示室の中で再現展示する試み。

《USA ビジターセンター—モデルユニット》(2017/2022)。現地に作ったツリーハウスからは「自由の国」の広大な風景が一望できる。今回の展示室の中で再現展示する試み。



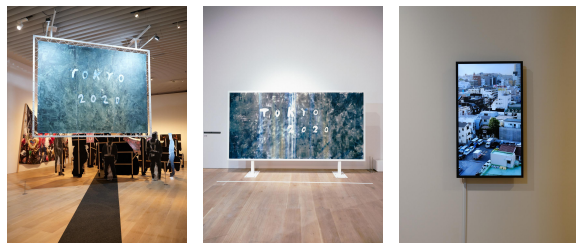
2014年からは「ジ・アザー・サイド（向こう側）」というアメリカの国境問題をテーマにしたシリーズを手がけている。メキシコのアメリカ国境近くのスラム地区にChim ↑ Pomは訪れて、現地の人に協力してもらい、彼らの土地にツリーハウスを作ったり、メキシコ側からアメリカの国境沿いに穴を掘り、その穴の中の土の底の境界にあたるところに足跡を残すということをしてきた。ジ・アザー・サイドというのはメキシコ側の国境沿いに住む人がアメリカを呼ぶときの通称。その記録の写真作品に加え、展覧会会場にそのツリーハウスを再現している。

●May, 2020, Tokyo



《May, 2020, Tokyo（大久保駅前）—青写真を描く—》（2020）。青焼きの感光液を塗布したビルボードを人通りが激減した緊急事態宣言下の都心部の街中各所に設置した。

《May, 2020, Tokyo（へいらっし部分は感光させず白く残す。日光はずのこの年の“青写真”》。1 / 3



東京オリンピック、パラリンピックが開催されるはずだったけれど「ステイホーム」が呼びかけられた街。

「May, 2020, Tokyo」は新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言下の東京で行われたプロジェクト。Chim ↑ Pomは青焼き写真の感光液を塗ったビルボードを都心部の街中各所に設置。「Tokyo 2020」「新しい生活様式」という文字の部分は感光させず白く残した。東京オリンピック、パラリンピックの開催という明るい青写真を描いていた東京に新型コロナウイルスが奇妙な現実の影を落とした記録になっている。

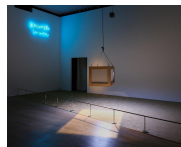
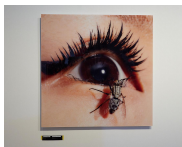
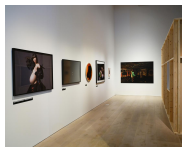
●エリイ



《ラブ・イズ・オーバー》（2014/2022）エリイの結婚披露宴として行われたパーティとデモ（パレードと言った方が正しい？）の様子を作品化した。



「サンキューセレブプロジェクト」の高級バッグやセレブポーズのエポ。それをオークションで買った、



Chim↑Pomのメンバーであるエリイはポップアイコンであり、また文芸誌で執筆したり、マスメディアにも登場するなど存在や活動が注目されている。本展のタイトル「ハッピーズプリング」も彼女の命名である。彼女はカンボジアの地雷原でチャリティとセレブリティ文化をテーマにして、地雷爆破とその後、オークションで作品を販売して、その売上げをカンボジアに寄付するプロジェクトを行なった。自身の結婚を祝うパレードを新宿の路上で行ったがその際にはデモの申請を行い、正式に許可を受け、西新宿にあるロバート・インディアナ作のパブリックアート《LOVE》にゴールした。その様子を写真をもとに書割を作り、《ラブ・イズ・オーバー》という作品に仕立て上げている。

5人のメンバーを日常的に翻弄する破天荒さで問題を突きつけてくるエリイ。既存のジェンダー的概念、フェミニズム論、アーティスト像では括ることのできない彼女の多様な側面に焦点をあてたセクションが「エリイ」として独立している。

●金三昧



ミュージアムショップの一部がオフィシャルストアに。

館内のミュージアムショップの一部がChim↑Pomのオフィシャルストア「金三昧」になり、オリジナルグッズの他に、マルチプル的なアート作品や一見すると冗談のような商品なのか、作品なのかあるいはその境目にあるユニークなものが販売されている。Chim↑Pomのメンバーが普段使っていたクルマ「Chim↑Pomカー」が陳列棚になっているがそのクルマも販売するとのこと。

●くらいんぐみゅーじあむ



会場内に現れた託児所「くらいんぐみゅーじあむ」。

Chim↑Pomメンバーの子育ての事情から着想を得たプロジェクトで、会場内に託児所を開設した。子育て中の人が積極的に美術館を訪れ、アートに触れる機会を増やせるようにするのが目的。静かであるべき美術館にあえて、子どもの泣き声や遊び声を響き渡らせることで美術業界だけでなく、社会全体における子育て環境への問題をあらためて提起するというもの。予約申し込みなどは美術館のサイトで確認のこと。

●ミュージアム+アーティスト共同プロジェクト・スペース

この展覧会が実現するまでの過程で生じたアーティストと美術館の間の立場や見解の違いを多様な観点から議論を発展的に深めるために「共同プロジェクト・スペース」が作られた。ここではさらに現代美術の可能性と限界の歴史、表現の自由、そして表現の背景にある幅広い社会問題までを話し合うことを目的にしている。《スーパーラット（千葉岡君）》（2006）や映像作品《スーパーラット》（2006/2011）、Chim↑PomのコミッションによるEDI MAKの映像作品《ハイパーラット》（2022）などの作品も展示されている。

さて、展覧会開幕の記者会見でChim↑Pomリーダーの卯城竜太が語ったことに重要な点がいくつもあるので書き留めておきたい。

- ・前述したように「回顧展」としているがこれは一つのプロジェクトであること。
- ・「道を育てる」という形で変化し、発展していく展覧会であること。
- ・現代美術は美術館に限らず、社会や世界とどう関わっていくかという行為であること。
- ・作家と美術館の事情の違いをもって敵対するのではなく、どうすれば摺り合わせ地点を見つけられるかの実験も含まれていること。そのための議論の場を用意すること。

さらにChim↑Pom自身、アーティストコレクティブだが、その活動や今回の展覧会実現にはメンバー以外の多くの人が関わっていることを強調し、その人たちの名前を列挙していたのも彼らしいという印象を残した。

Chim↑Pomのこれまでは、報われない挑戦もあったかもしれないし、ある意味、社会を巻き込んだ、あるものは壮大な、あるものはささやかな実験であったかもしれない。この展示を見ることで驚き、笑い、呆れるといいと思う。社会問題や世界情勢への関心を高めるきっかけになれば一層いい。そして、実は今度は彼らが見せてくれたものを見ているわれわれ観客も作品に取り込まれ、試されていることに、ふと気がつくこともあるだろう。

[🔗 公式サイト](#)

『Chim↑Pom展：ハッピーズプリング』

〈森美術館〉東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー53階。～5月29日。会期中無休。10時～22時、火曜のみ10時～17時（最終入館は30分前まで）。入館料1,800円。

[📍 Google Maps](#)

Related
 関連記事



F FASHION

ジェンダーを超越するジョン・ガリアーノの表現。〈メゾン マルジェラ〉ポップアップ！



F FOOD

コーヒーと音楽で働く時間をデザイン。《Work Design Coffee》とは？

建築好きの“やどかり”を発見!? AKI INOMATA国内初の個展。

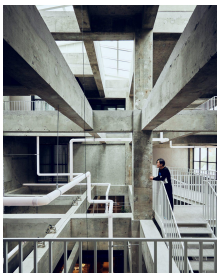


Pick Up 注目記事



D DESIGN

時代の変化を捉えつつ、くらしの可能性を広げるアイデア。 | サンワカンパニーデザインアワード 2022



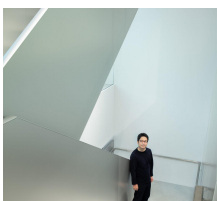
T TRAVEL

〈白井屋ホテル〉〈丸福樓〉〈スイデンテラス〉も！山田遊が“旅のサブスク”サービスでアート鑑賞。



D DESIGN

〈フリッツ・ハンセン〉の名作モジュラーソファシステム〈アルファベットソファ〉。



D DESIGN

吉岡徳仁がデザインしたイッセイ ミヤケ新店舗が見せる「未来」。

PR

PR

PR



PR

D DESIGN

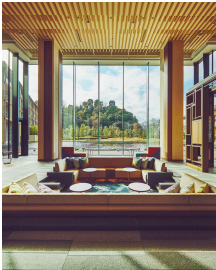
〈とうふ〉と〈いなり〉が叶える優しい眠り。台湾発〈SLEEPY TOFU〉のある暮らし。



PR

T TRAVEL

「ホテルインディゴ」「インターコンチネンタル」...〈IHGホテルズ&リゾーツ〉に泊まる春の旅へ。



PR

D DESIGN

〈パウワース&ウィルキンス〉の洗練を極めたオーディオ体験ポップアップ。



PR

D DESIGN

岡山県児島の縫製工場がデニムブランド〈NC PRODUCTS〉をスタート。



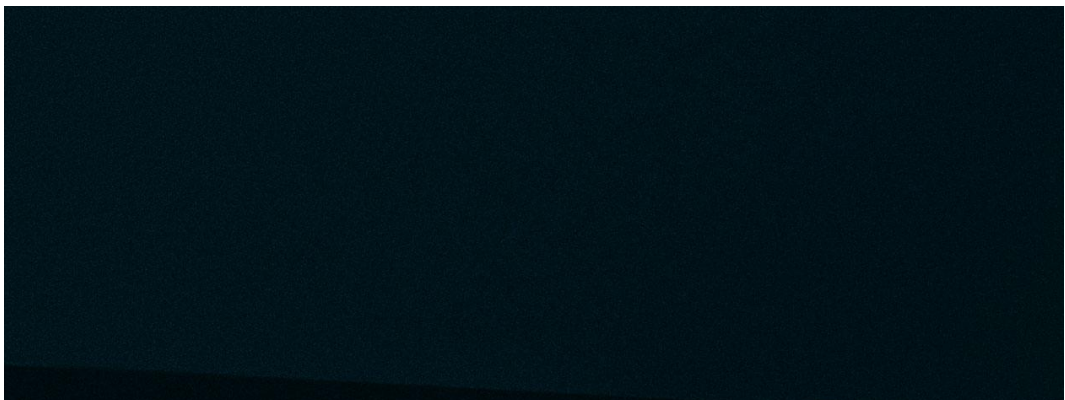
F FOOD

【365日豆皿つまみ】菜の花とホタルイカ、チョジャンがけ | 3月 キム・ナレの韓国つまみ



Special

スペシャル





UPDATE 2023.03.10

鳥とジュエリーのファンタジックな物語。



Recommend 厳選おすすめ



視覚で楽しむハーブティーとガラス
の茶器10選。



わらしちゅい

3月23日のお告げ

No.1

No.2

No.3



射手座

★★★★★

全体運は快調じゃ。人の世話を焼くおぬしの姿に、密かに恋心を抱く異性が出現しそう...



獅子座

★★★★★

全体運は快調じゃ。気になっていた異性から声をかけられるなど、嬉しい展開が期待で...



双子座

★★★★★

全体運は好調じゃ。おぬしのアイデアを遊び心で活かすとよからう。新しいスポットは積極的に...

自分の星座をみる

BRUTUS
Casa iD
【カーサiD】

登録すると、会員限定の3大特典が手に入ります。しかも無料。今すぐ、登録を！

会員登録

メルマガ登録（無料）

本誌発売日などにメルマガをお届け！

メールアドレスを記入してください

☐ [プライバシーポリシー](#)に同意する

ご登録頂くと、弊社のプライバシーポリシーとメールマガジンの配信に同意したことになります。

登録する

[メルマガ解除](#)

BRUTUS
Casa



CATEGORY

DESIGN	EASHION
ARCHITECTURE	ART
FOOD	TRAVEL
VEHICLE	CULTURE

REGULARS

- インテリアブランド名鑑
- 高木教雄の名作時計デザインの秘密
- 冷水希三子の郷土料理研究レシピ
- 青野尚子の今週末見るべきアート
- 石田潤のIn The Mode
- 寺尾妙子のNEWSなレストラン
- 甲斐みのりの建築半日散歩
- 川合将人のインテリアスナップ
- 小西亜希子の北欧デザイン通信
- 鈴木芳雄の「本と展覧会」
- 土田貴宏の東京デザインジャーナル
- 山下めぐみのロンドン通信
- 吉田実香のNY通信
- 輪湖雅江の器とごはん
- Pのローカルレストラン探訪
- ニッポンのお宝、お蔵出し

anan	BRUTUS
POPEYE	クロワッサン
GINZA	Hanako
&Premium	Tarzan
colocal	Hanako ママ
クウネル・サロン	こここ
MCS	マガジンワールド
広告掲載	Privacy Policy
オンラインプライバシー通知	